談話室

予断と偏見あればこそ

どんな職業にもあるのだろうが，私の前職の記者という職業も誤解を受けることが多かった。例えば若い女性から「あなたたちのような人はインテリやくざと言うんでしょう」と詰問されたことがある。こちらは所詮“その日暮らし”の取材記者。理路整然と論理を展開するほどの蓄積もないし，かといってわが身を危うくしてまでたんかを切る勇気もない。どう答えたら良いか分からず，ただただ笑ってごまかすしかなかった。

これは明らかに誤解なのだ。そうした記者に対する数々の誤解の中でもさいたるものは，「記者は予断と偏見を持たない」という誤解だろう。

農村もののミュージカルを数多く世に出し，「人が住み暮らしているところならどこでも…」トラックに衣装から大道具，小道具一切を積み込んで公演するという勢いで，すでに433市，515町，104村で，４千近いステージを踏んでいる（今年４月現在）という劇団がある。「劇団ふるさときゃらばん」だ。ここで制作・演出を手がける石塚克彦さん。劇団のほとんどのミュージカルは，石塚さんの手による。石塚さんは作品を制作，上演する際には事前に徹底的に現場を取材することで有名だ。だいぶ以前のことになるが，ある日石塚さんから，記者の取材について聞かれた。

私は「記者は予断と偏見を持っていないと言われるが，これは誤解。私はほとんどの記者は，本人が意識しているか否かは別として，取材を始めるときはおおよそ予断と偏見を持ってものを見ていることが多いと思っている。しかし，自分はもしかしたら予断と偏見に満ちているのではないかという懸念は持っているから，それを確認することが必要になる。それが取材だと思っている。むしろ自分の見方に予断と偏見は無いと思うことのほうが危険である。ときには予断と偏見の塊のように映る記者が重要な記事を書いたりする」と答えた。

少し大げさかもしれないが，予断と偏見は，ここでは問題意識と置き換える

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。

こともできる。そういった意味である。そして，ここまでは石塚さんも同意した。「同じですね」と。石塚さんもわれわれ記者と同様，極端な言い方をすれば予断と偏見による見方であることを恐れながら，突き動かされて，取材に臨むというのだ。

だからよく「記者のくせに予断と偏見をもとに取材している。それでいいのか」という批判を聞く。しかし，それは違う。予断と偏見から見たことをそのまま記事にしてはいけないが，取材が終わるまでは予断と偏見を持ったままであることも多い。少なくとも，良心的であればあるほど，そういう懸念を抱いているのである。したがって，記者の取材に対しては，予断と偏見を修正できるように取材に応じるほうが問題は少ないのである。情報開示の必要性はこういうところからも指摘されているのではないか。私は，間違いを起こさないためにも，取材には積極的に対応して欲しいという思いがあるが，その理由はこういうところにある。

さて取材の後，記者はどうするか。経済，社会情勢に関する判断にもよるが，予断と偏見で考えたり，見たりしたことが事実であったとしても，間違いであったとしても，それはそれで必要ならば記事にする。間違いであったことに気づいたならば正しいことは何か，さらに取材を深め，記事にする。ところがここからは石塚さんは違っていた。石塚さんは「自分の予断と偏見であろう見方で見ていたものが当たっていた時にはあまり感動しない。予断と偏見が覆されたときのみ，作品を書こうという気になる」という。そのときに初めて制作意欲がわくというのである。

ここが記者と芸術家の大きな違いだ，と大いに感じた。記者は人々に伝えなければならないことであれば，自らの予断と偏見が覆されたか否かにかかわらず，せっせと原稿を書く。数ある事象を選りすぐって作品にする芸術家とは大きく違う。ただし，記者も芸術家も自らの予断と偏見によるものの見方が，取材や執筆の原動力となることに変わりは無い。予断と偏見は大きなエネルギー源になることが多いのである。

（(株)農林中金総合研究所顧問　野村一正・のむらかずまさ）

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。